

X 社会貢献

1. 生涯教育としての社会人学生の受け入れ

現状

本編V章1-A(5)「社会人入学試験」にあるように、2002年度から英文学科が社会人入試を開始した。一般入試でも社会人が入学することもあるが、正規学生として入学した社会人学生に対し、履修方法についての特例はとられていない。

また、正規の学生以外に、科目等履修生、聴講生の受け入れがあり、教員免許状等の取得や教養のためといったそれぞれの明確な目的をもった学生が入学している。

大学院理学研究科では、1998年度から社会人入試を実施している。また、文学研究科および理学研究科では2003年度から、修学休業制度を利用した現役の中学・高校教員を対象とした特別の入試を実施し、現職教員の再教育を行なうこととしている。入学後の履修方法については、広く教育界の要望および社会的な要請に応えるため、便宜が図れるよう配慮することとしている(V章2-A「大学院入試」参照)。

問題点と改善の方策

社会人を対象とした入試によって入学した学生は、開始間もないこともあって少数である。これらの実績を拡大する必要がある。また、学部の正規学生として受け入れた社会人および理学研究科の学生に対しては、履修において格別の措置が取られていないが、その者の社会的キャリアに応じたきめ細かい体系を用意することがその者の意欲に応えるためにも必要であろう。

2. 公開講座

A. 正規授業の開放

現状と評価

本学では、共通科目のうち、広く専門領域以外の学識を得る場としての役割を担っている科目である「総合」および「女性学」を一般に公開し、学生とともに受講することを認めている。これらの授業では、現代の最先端の学問状況についてのやさしい解説を通じて、今日的な問題への関心を向けさせ、知的能力や創造力を伸ばすことを目的として、一人一人がいかにかに生きるかを考える機会となっている。

このうち「総合」は、1978年度から開講され、1980年度から一般に公開している。年度ごとに現代の切実な問題を取り上げ、毎回各界で活躍されている方々を招いて講演を行なっている。この「総合」は、学生と教員が協力して運営している点で、通常の授業とは違ったユニークな授業である。

テーマや具体的な内容について問い合わせがあるなど、一般市民からの関心が高く、参加者のほとんどはリピーターである。授業終了後に講師との懇談会が開催されることもあり、そこに参加する市民の方々も多く、在学生との交流の絶好の機会となっている。

図表 x -1 「総合」テーマ一覧

開講年度	テーマ	開講年度	テーマ
1978	現代からみた1950年代後半 (未公開)	1991	共に生きる
1979	現代をとらえる (未公開)	1992	人間
1980	市民としての女性	1993	自由に生きたい! -わたし自身への旅立ち-
1981	いま、平和を問い直す	1994	表現 -いのちという名の発信地-
1982	教育の再生を求めて	1995	不思議をたべよう
1983	アジアの中の日本	1996	私のアジア、私の地球
1984	現代文明とエコロジー	1997	メディア解体新書
1985	ことば	1998	20世紀を語る、21世紀を創る
1986	地域に根ざす	1999	-“結婚とは何ぞや”-
1987	女性・仕事・生活 -卒業生に聞く-	2000	ニッポン新発見
1988	わたしの国、そして日本 -在日留学生に聞く-	2001	～衣・食・住～
1989	表現の贈りもの -パフォーマンス-	2002	“トランス主義”
1990	都市 -あらたなる地平のきざし-		

図表 x -2 「総合」一般受講者数

	延べ受講者数	開講回数	平均受講者数
2000年度	2,787	24	116.1
2001年度	1,531	25	61.2
2002年度	1,403	24	58.5

(2002年12月5日現在)

一方「女性学」は、1980年度に「総合」のテーマとして取り上げられたのをきっかけに、1981年度から独立した科目として開講されている。この「女性学」は、半期ごとに、異なる講師により「女性」について、社会学的、生物学的、文化学的など様々な角度から考察する講演を行なっている。

「女性」についての総合的研究がとりあげられるようになった昨今、一般市民の勉学意欲は旺盛であり、市民受講者の3分の1から半数はリピーターである。

図表 x -3 「女性学」受講者数一覧

開講年度		受講申込者
2000年度	前期	32人
	後期	32
2001年度	前期	20
	後期	21
2002年度	前期	23
	後期	30

この公開講座の広報は、本学のWebへの掲載のほか、『市報こいだいら』への掲載、近隣団体や過去の受

講者等へのパンフレットの送付を行なっている。

その他、国際関係学科の科目である「環境問題と国際関係」は2002年度から卒業生にのみ公開されており、5名が参加している。

生涯学習が盛んとなっている今日、本学の公開講座に参加している一般市民の年齢層は60才台が最も多い。幅広い年齢層の方々とともに学習し、意見交換ができることは、在学生の人間的成長にも役立つ機会となる。社会情勢の動向や地域社会からの要望を把握しつつ、地域との連携を図り、大学が開講している正規授業から公開講座へ提供できる科目の増加に努めることが必要であろう。

公開講座の内容のさらなる充実や運用方法の改善および広報の充実をさらに目指していきたい。

B. ウェルネス・センター公開講座

現状と評価

1997年度より、ウェルネス・センター開催の公開講座が行なわれている。この企画・実践は、保健体育教室の教員が担っている。

津田塾大学ウェルネス・センターはその前身である保健センターも含めると30年余りの歴史がある。設立当初はその10年前頃より国立大学において「保健管理センター」が設置されたことになり、津田塾大学においても「保健センター」と称していた。

当時は地域的にも医療施設も十分ではなく、いきおいセンターの活動は学生(特に寮生)の健康管理に重きをおかれざるを得なかった。しかしながらその後、小平の地は目覚ましい発展を遂げ多くの医療機関も充実し、センターは津田梅子の建学の精神に則った本来あるべき学生に求める姿勢を盛り込んだ理念を実現すべく、より充実したプログラムを展開することとなった。すなわち梅子の建学の理念である「全人教育」を実践する場としてセンターを位置付け、全学生がみのり豊かな学生生活を送ることを目指したのである。つまり狭い意味での治療や診療を中心とする機関ではなく、教育機関としての役割を担う場とし、この意味がより明確になることを願った結果が呼称の変更であり、1996年より現在の「ウェルネス・センター」に変更となった。

以上の目的に則って企画されたのが1997年から始められた「ウェルネス・センター公開講座」である。公開講座そのものは津田塾大学においても、その他多くの大学においてもすでに多くの企画・実践がなされており、決して目新しいものではなかった。

そのような状況にあってなお「ウェルネス・センター公開講座」が毎回多くの参加者を得、今後の存続を期待されているのは、すでに6年間、「ウェルネス」という一貫したテーマで年5回ずつ継続していることによる。前述したように「ウェルネス」とは「社会的存在としての人間が、各人それぞれ自己の状態を身体的、精神的、情緒的、霊的に最善の状態にするとともに、人間関係や自分を取巻く環境の面でも最善に保たれているということ」を意味し、そのようなライフスタイルを各自が選び取れることを願ってのテーマである。従って、年齢、社会的役割等に関わらずあらゆる人々にとってすべからず自らのテーマであるという点で、学内外に大きく貢献してきたといえよう。

それぞれの年のサブテーマは以下のようである。

1997年度	癒しのエネルギー	2000年度	いのち第Ⅱ部
1998年度	癒しのエネルギー	2001年度	いのち第Ⅲ部
1999年度	いのち	2002年度	共生

さらに各講師の講演タイトルについては、6年目の「共生」の場合を例に挙げると、第1回「障害者と健常者」(青木優氏)、第2回「人と環境」(三浦永光氏)、第3回「女性と男性」(青木やよひ氏)、第4回「様々な生きもの」(伊澤紘生氏)、第5回「生と死」(帯津良一氏)であり、毎回1名は大学内の教員に講演を依頼している。参加者は毎回、学内外から100人前後の申込みがあり、特に2002年度の「生と死」と題した帯津良一氏の講演には200名以上の申込みがあった。

また、多くの人の参加を可能にするために、学内保育所であるさくらんぼ保育所の協力を得て保育サービスを行なっていることも付け加えておきたい。

さらに小平市からはこの企画に対する賛同・後援を得、パンフレットの配布等においても全面的な協力を得ているので、今後も継続に向けて努力していくつもりである。

3. 津田梅子記念交流館の活動

現状と評価

創立100周年を記念して設立された津田梅子記念交流館は、大学の教職員・学生・同窓生・一般市民のさまざまな活動に対して、機会と場を提供することを目的としており、現在次の事業を行なっている。

(1) <津田塾フォーラム>の実施

大学が計画するプログラムで各人が生涯にわたって、創意あるときをおくり、自らの人生にイニシアティブを発揮できるよう、感性を深め、豊かな知識と方法を体得できることを狙いとする。

(2) <自主フォーラム>の支援

教職員、在学生、市民が、さまざまな目的のための情報交換や研究会を行なうためのグループを作り、活動できる場を提供することを狙いとする。

(3) 自由な交流の推進

教職員、在学生、卒業生、地域社会の人々、海外の者との交流をすすめ、多様な個性が出会う場をつくることを狙いとする。

<津田塾フォーラム>は、「私を生きる(Initiative/Gender)」、「思いは広く(Multicultural/Global)」、「心は深く(Creative/Spiritual)」の3つの柱に従って企画している公開講座である。

2002年度は15の連続講座、15の単発プログラムを実施している。これらは、市報への案内掲載や公民館でのちらし配布などによる地域住民への積極的な呼びかけをはじめとして、一般新聞へも情報提供を行なっている。9月末までに終了したプログラムにおける参加者のうち約73%(420人)が一般市民である。特に市民生涯学習講座として提供している連続講座に参加した市民からは続編を希望する声も多く、リピーターも徐々に増えている。また、参加者からのアンケートに基づき、同じプログラムの提供だけではなく、さらに発展させたものの提供も行なっている。

プログラムは、上記の3つの柱にそって、英語の広場、世界の広場、芸術の広場と多様な分野からのプロ

グラムを提供するよう工夫しており、また、英語の広場、世界の広場のプログラムについては本学の専任教員によるプログラムも必ず提供するように計画(2002年度は5プログラム実施)している。

特に特別集中プログラムとして夏休みに提供した「英語教員のためのワークショップ」には英語教員だけでなく、卒業生、在学生、英語教員以外の者等全国から参加があり、熱心に英語で議論する場となり、今後、現職の教員研修プログラムとしての位置付けをして発展させていくことも考えられている。

<自主フォーラム>は、現在、以下の8つのグループが活動を行なっている。

フォーラム名	活動の内容
小学生英語のひろば	初等教育における英語学習の指導をテーマとし、研究を行なう。
日本語教育&国際交流フォーラム	日本語教育や国際交流についての情報・意見交換および研究会を行なう。
数学と数学教育を学ぶ会	数学教育についての情報交換および研究会を行なう。
ハルモニウム	パイプオルガンを弾き、親睦を深めることを目的とする。
津田塾からし種の会	キリスト教について考えると共に、津田塾大学のキリスト教関連行事をサポートすることを目的とする。
津田OGトーク	同窓生の情報交換を目的とする。
edu-caf	教育についての情報交換を目的とする。
津田ウェルネス・ネットワーク	グローバルな視点から環境問題をも含むこむ広範な健康問題についての情報交換および研究することを目的とする。

それぞれの自主フォーラムは、定期的に研究会の実施やニューズレターの発行など多様な活動を行なっている。そのなかでも「小学生英語のひろば」は、近隣の小学校での「総合」の時間における英語教育の実践やクラブ活動への支援、夏休みおよび春休みの交流館プログラム「子ども英語クラブ」にその成果を結実させている。これらの自主フォーラムの活動が津田塾大学関係者内にとどまらず、その輪を地域にひろげ、さらなる交流の場として発展していくことを期待し、交流館はその支援を続けていくものである。

自由な交流を推進するため、広く交流の場を提供するとともに、現在、次の2つの活動が、交流館を中心に行なわれている。

- (1) 5女子大学コンソーシアムのメンバーとして、2002年度から「アフガニスタン女子教育支援」に参加している。教員・学生・卒業生・地域の市民も加わり、アフガニスタンからの女性教員を迎えて研修プログラムを実施することとしている。
- (2) 2002年度から、学術・文化・産業ネットワーク多摩のメンバーとなり、地域産業、大学間の連携について活動を開始した。初年度では、他市主催の子ども企画への学生ボランティア派遣に協力を行なった。今後、このネットワークを通じての地域や企業、他大学との交流の場として交流館が活用されることになるであろう。

問題点と改善への方策

- ① 交流館はその活動をはじめてから2年を経て、提供するプログラムについてかなり体系化されつつあるが、あらたな分野の開発とともに交流館としての主体性の発揮、本学の立場からの指導助言などのあり方について検討が必要と考えている。
- ② 新たなニーズとして高校教員の研修としてのプログラムの提供が求められている。それに応えて、交流館としてのプログラムを、学内教員の協力を得て、2003年度実施予定である。
- ③ アフガニスタン女子教育支援研修プログラムやネットワーク多摩の活動が、今後本学の教育研究活動と

してどのように充実・発展していくか、またそのための事務体制の整備が課題である。

4. 分散教育システム・リサーチ・センター分室 津田梅子資料室の活動

現状と評価

資料収集、整理、保存、貸出

津田梅子資料室は津田梅子およびその周辺の人びとに関する資料、女子高等教育、日米の女子教育関係史資料、本学の歴史、本学卒業生に関する資料、各種教科書などを積極的に収集している。

収集所蔵している各種史資料は日本史や教育史の研究者などに貴重な研究材料になっている。また、卒業生のみならず研究者、出版社、雑誌、テレビ関係などへ、そして小学生から大学院生および留学生までも含めた広い対象に対して、各種史資料提供、レファレンスを行なって、学校教育、社会教育に多大の貢献をしている。また外国からの資料提供依頼も受けており、国際的にも社会貢献を果たしている。

レファレンス

小学生より大学院生、研究者、一般人、マスコミに至る幅広いレファレンスに対応している。津田梅子やその周辺の人物、本学の歴史、女子高等教育関係のレファレンスを受け、史実調査・資料探索、調査などを行っている。アメリカからの留学生(他大学院生)が博士論文の研究のために来室するなど、研究および教育面での国際的な支援を行なう場としての役割をはたしている。

また大学の出版物(ガイドブック等)・津田梅子のコーナーを担当することで大学の広報の重要な一翼を担っている。

企画展示

2000年度に改修された津田梅子資料室では、新たに設けられた展示スペースを利用して、年1回の企画展示を行なっている。観覧は無料で開室は平日9:00～16:00である。学内オープンキャンパス計画とタイアップして、平日のツアー、進学相談会、父母のためのツアーはもとより、該当する土・日・祝日にも開室し、また津田梅子命日、ホーム・カミング・デー、塾祭などの休日も開室している。

観覧者は本学学生をはじめ小学生から一般まで幅広い。2001年10月から2002年8月初めまでは、「岩倉使節団派遣から130年最初の女子留学生たち 大山捨松、瓜生繁子、津田梅子」であった。読売新聞、東京新聞、中日新聞などで紹介されるなど大好評であった。2002年8月16日から「女性の教育と地位向上に捧げた藤田たきの生涯」を2003年8月まで開催する予定である。多くの在学学生も展示コーナーを観覧し、本学のアイデンティティと日本女性の近現代史を学ぶ場としてもその役割を果たしている。授業の一環として展示コーナーを使用する教員もいる。社会に広く貢献し、本学の特色を活かした形で学内の教育にも資する空間となっている。2002年度の実績は以下のようである。

「女性の教育と地位向上に捧げた藤田たきの生涯」観覧者数

*ホーム・カミング・デー 213名 *津田塾祭 119名 *シンポジウム当日 57名

シンポジウム2002年世界にはばたく各界の6人が、パイオニア藤田たきを語る

企画展示と連動する形で、2002年11月23日(土・祝日)に、津田梅子記念交流館共催でシンポジウムを行

なった。ここでは主として国際的に活躍した藤田たきを見つめなおし、若い世代が21世紀に飛躍する糧を吸収し、発見する場とした。一般の人には藤田たきをあらゆる角度から知ることにより、たきの思想を次世代に伝えるきっかけとなったと考えている。参加者は158人であった。各界で著しい業績を上げたパネリストから、直接お話を聞くことができたことは、学生たちにとって教育的効果が大きく、また一般公開であったため、社会的貢献をしたシンポジウムであった。

映画「夢は時をこえて—津田梅子が紡いだ絆」

2000年度に制作されたドキュメンタリー映画の制作時には本資料室は、資料提供、撮影協力、シナリオ内容調査、校正など多方面から協力した。各地の自治体、女性団体などで公開されるにあたり、本資料室は発信場所として資料提供、レファレンス、事務連絡等を担当している。本年度は現在までに予定を含め14ヶ所の上映となる。学内では授業での上映、新入生オリエンテーション、オープン・キャンパス、塾祭での上映に協力し教育的支援を行なっている。

映画「夢は時をこえて—津田梅子が紡いだ絆」英語対訳シナリオ作成プロジェクト

上記映画の日本語シナリオを翻訳したブックレットを作成し、ビデオに付して外国の日本研究を持つ大学、教育機関、日本センター等に送付するプロジェクトを進行中である。外国に日本文化および日本女性史を紹介する一翼を担い、日本語学習や、国際理解教育の教材としても活用可能である。

『津田塾大学 100 年史』編纂

2003年3月に刊行された『津田塾大学 100 年史』は近代社会史における津田塾大学史として女性史、ことに女子高等教育分野での優れた学術文献として重要な資料を提供することが期待される。

問題点と改善の方策

企画展示室の開室が通常、学生や勤務者が来られない平日となっている点が改善されれば、更なる社会貢献ができよう。

5. 教育研究活動における社会との連携

現状と評価

教員の社会貢献として、派遣先の機関から委嘱状の請求があったものを過去5年にわたり調査したところ、下表にあるとおり延べ36人が専門分野を活かして学校、官庁等での講師等を務めていた。全体的な傾向としては、本学の特色である英語をはじめとする語学教育面での貢献が多い。

2002年度の特徴あるものとしては、アフガニスタン復興支援の一環として、本学が他の4女子大学と協力してアフガニスタン女子教育支援を行なっていることが挙げられる(本章 3. 津田梅子記念交流館 参照)。

図表 X-4以外の社会貢献で主なもの、学会及び公的機関の役員が挙げられる(別添「専任教員の教育研究業績」参照)。教育研究活動とは直接結びつかないが、職員についても、延べ6人が担当業務に基づき、研修会等の講師を務めている。

図表 x-4 学科・教室・事務局別の他機関からの委任状数

所属	人数
英文学科	18人
国際関係学科	13人
保健体育教室	2人
情報数理科学科	3人
事務局職員	6人
合計	42人

問題点と改善の方策

語学教育での貢献や、情報機器を活用した2001年度の一般市民を対象とした IT 講習会などは、本学の特色を活かした貢献として評価できる。特に語学教育を活かした活動に関しては、英文学科、言語文化研究所、津田梅子記念交流館等を中心に積極的に社会貢献をしようとする姿勢が際立っている。それ以外の分野でも、大学の所有する「知」をさまざまな形で社会に還元することは可能である。津田梅子記念交流館を中心として、受け身ではなく大学から社会に働きかけていくような体制を目指すべきであろう。

6. その他の社会貢献

(1) 学内保育施設

現状と評価

約20年前に大学院生の提案で誕生した学内保育施設を前身とする学内保育所を構内に設置している。当初は学生同士が互いの子供の面倒を見合う形のものであったが、まもなく常設の保育所となり、利用者（親である学生、教職員）が保育者を雇用し、保育以外の運営は利用者が共同で担う運営方法がとられてきた。しかし、教職員の年齢層の変化もあり、利用者が減少し、従来の方法では円滑な運営が行なわれない事態となった。

学びながらあるいは働きながら子供を育てることに対する支援は、女性の自立を理念とする本学のあり方にも合致していることから、2000年度に大学が財政および事務の支援をし、保育は民間保育サービス会社に委託する方法を導入し、保育所を存続させることとなった（2001年度の利用者は定期利用が9名、一時利用が18名である）。利用者は学生、教職員が中心であるが、公開講座の受講生もこの保育所を利用することができるかと定めている。

問題点と改善の方策

少子化の影響や教職員の高年齢化などの影響で利用者が少ないことが最大の問題点である。また、公開講座の受講生にも保育所の存在がどこまで理解されているか、広報面の強化も必要であろう。しかし、将来的には、学生の年齢も現在より多様化することが予想され、そうなると子供を育てながら学ぶ学生も増大するものと思われる。そのためにも、いくつかの課題はあるが、保育所は存続させるべきであろう。運営に当たっては、子供の安全面に最大の配慮を払うのは当然であるが、大学の支援を受けていることから、財政面の

透明性にも注意を払う必要がある。

(2) 津田梅子記念会

現状と評価

例年10月の第1日曜日に同窓生のホームカミングデーとして、同窓会と共催で開催している。創立者津田梅子を偲ぶ記念礼拝が主要な行事ではあるが、午後には、学外者も対象としたシンポジウムを開催し、地域住民の方などへ広く参加を呼びかけている。また、エッセイコンテスト(V章 D「入試広報」参照)の表彰式もここで行なわれる。2年前には、地域住民の方々にフリーマーケットの会場を提供し、多くの市民で賑わった例もある。

問題点と改善の方策

シンポジウムのテーマにより、学外者の参加は大きく左右される。一方、大学として教育研究にも資するテーマが望ましいこともあるので、その調整が今後の課題であると思われる。

この記念会が、大学の持つ知的財産を公開し、理解してもらうための重要な行事として位置付けられるため、津田塾大学の特色を表し、地域住民の方にも関心を持ってもらえるテーマを検討することが必要であろう。その際、2000年に設置された津田梅子記念交流館が、学外者向けの公開講座を多数開設し、一定の実績をあげているので、そのデータの活用を図るべきであろう。